

川柳

数えれば数える程に亡姑の恩<sup>はは</sup>

坪郷英美子

できること考え生きるお年頃

藤井 節子

口だけは人なみですが足が駄目

藤井 絹枝

顔を見て名前出てこぬもどかしさ

磯部 佳子

通院日娘と共に3時間

山口 美智子

俳句

杉玉や奥に店主の冬帽子

藤岡 久美子

差湯して首まで浸<sup>っ</sup>かる凍てし夜

貞弘 和子

擦り切れし母の指貫針供養

林 保江

煮くづれの大根旨し夕餉かな

春吉 智子

車窓より声掛けらるる梅見かな

金内 憲一

短歌

意地を張る張り合う君が側にいて今年一番の寒波襲来

江川 詳子

飾らんと薄を抜けば指先の切れて血の色まだまだ赤し

賤間由美子

新春の空に耀かがよふご来光拍手のひびく産土うぶすなの杜

末永 敦子

田島山小さき沢に露の臺がんびりぬいた春の先達せんたち

森坂 達夫

亡き母に似たる丸き背衿を立てバス待つ老いの肩に積む雪

藤井 美智子

自由律俳句

今朝のよろしさ焙じ茶の湯気

佐川 智英実

音も色も消して雪降り積もる

池田 幸

どこかが痛い体とあしたへ

岡村 裕司

まあいいかと空を見上げる

田中 里美

最終バスに飛び乗るため息ひとつ

岡部 雅江